

トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

〒163-0437 東京都新宿区西新宿2-1-1

新宿三井ビル37F

Phone: 03-3344-1701(代)

Fax: 03-3342-6911

URL: <http://www.toyotafound.or.jp>

No.99

Dec. 2002

特集：研究対象との出会い

中国帰国青少年の「フィールドワーク」 —黒龍會／青年部との関わりから—

京都大学教育学研究科 鍛冶 致

●フィールドの概況

私がフィールドワークさせてもらっている地域では1993～1997年に中国帰国者が急増。当地の中学校では1997年に最も多くの中国帰国卒業生を出した（全卒業生の4.6%）。

1995年春、この地域では日中友好交流会が組織されており、社会福祉協議会の助成で毎年数回の地域交流事業を実施している。これは、震災直後の炊き出しボランティアを契機に中国帰国者が自発的に組織していた団体と、社会福祉協議会の後押しを受けた自治会関係者達が、寄り合ってきた団体であり、同会の活動には地域の小中学校の先生も参加している。

●調査対象との出会い

私は1996年にこの地域に移り住み、当地の中国帰国青少年達とよく遊ぶようになった。当時、彼らの「日課」は大体以下の通りだった。

昼頃起床。パチンコ店や友人の家をぶらぶら。夕方に市民プラザを覗き、そこに仲間がいればホールで一緒に騒ぐ（週末であれば仕事を終えた青年も合流）。夜中は付近の公園で談笑（またはトランプ）。このとき他市からゲストが到着することもある。その後は車に分乗して暴走族を見物に（追いかけに）行くこともあるし、誰かがおごると言えば24時間営業の風呂屋やカラオケに行く。

なお、1日のシメとして私の家を訪れる者も多く、終電の改札口で「待ち伏せ」に遭ったり、寝ているところを「襲撃」されることもあった。多いときは7人。冬は布団の取り合いだ。

●「非行防止」プロジェクト

1998年に入ると、私は、地域の人々から彼らのまとめ役を期待されるようになった。彼らが悪い道に入らぬよう、どうにかして欲しいとのことだった。

実際、市民プラザでの彼らの行い（唾はく・騒ぐ・タバコ吸う）は評判が悪く、地域の中国帰国者が警備員として雇用されるほどだった。また、彼らは土曜の夜に催されている「日本語識字教室」に「乱入」して中国帰国者の女の子や小学生を挑発するので、保護者からも嫌がられていた。

私は「任務遂行」に当たり以下の兩名から全面的なバックアップを受けた。1人は教育委員会の先生。この先生は中国帰国青少年が東京で組織したドラゴンと総称される「暴走族」のこともなんかも知っていて、前々から彼らの進路を心配してくれていた。もう1人は元自治会の連合会長で現日中友好交流会の会長。「あいう年齢で外国へ出た子らは最も気の毒。兄もカナダ育ちだったから良く分かる」。会長さんはいつもそう語っていた。

1999年のヤングフェスタでの記念撮影。前列右端が筆者。



CONTENTS

特集 研究対象との出会い 1

国際シンポジウム「コリアン・ネットワーク」 5

JCO臨界自己総合評価会議研究報告会 6

新刊紹介 6

かくして、日中友好交流会には青年部が創設され、初代事務局長には私が就任。事務局は9畳のフロなしアパート(要するに私の自宅)に置かれた。

●黒龍會か青年部か？

青年部の創設は彼らを喜ばせた。活動費支給もさることながら、何より自分達の存在が大人から認知されたのが嬉しかったらしい。ただし、青年部という名称については「却下」。彼らには黒龍會という立派な(?)チーム名が既にあったのだ。彼らが私のパソコンで作成した「極秘資料」を以下に紹介しよう。

黒龍會2代目極秘資料。

俺の名前：○○○。

1979年○月○日生まれ。身長175cm。体重65kg。黒龍會2代目総長。

黒龍會2代目総長です。これからはもっと黒龍會をまとまりのあるように、そして関西一の暴走族にしたいです。以上。

俺の名前：▽▽▽。

1981年▽月▽日生まれ。身長173cm。体重65kg。黒龍會2代目親衛隊長。

黒龍會2代目親衛隊長です。日本に来てまだ1年ですが黒龍會の皆さんとはなかよくやっています。これからも黒龍會の一人として天下無敵の名を守り続けます。夜路死苦。まだ延々と続くが、もうこの辺でいいだろう。

日本人の青年がデザインした黒龍會の旗



とにかく、こうして私の自宅は名実共に黒龍會の事務所となった(その後、旗つくれとか、表札つくれとか言われたが断った)。

●ヤングフェスタ

1998年秋、青年部は黒龍會の看板を掲げヤングフェスタ(=ライブと模擬店が中心の教育委員会主催イベント)に水餃子を出店した。この話は教育委員会の先生が持って来てくれた。出資金は日中交流会が全面的にバックアップ。この年は同じ地域出身の中国帰国生(高校大学進学組)も出店したとあり、張り合いながらも互いに盛り上がった。また、彼らが中学時代にさんざん手を焼かせた中国人講師も応援に駆けつけてくれた。

翌1999年秋は羊肉の串焼きを出店したが、実はこの年は終了後に一悶着あった。来場者の減少等で売り上げが伸びず打ち上げをする資金に困った青少年達は、会長さんに対し、別途カネを要求したのだ。私や教育委員会の先生が「金なら都合してやる」と言っても彼らは納得しなかった。そういうカネはもらいたくないのだと言う。また「打ち上げは割り勘で」という訳にもいかない。彼らの辞書に「割り勘」という項目はない。

「俺達に毎年10万円くれると言ったで

はないか。残りの金をよこせ。俺達の金だろう」「そんなこと言ってない。肉が売れ残ったのはやり方がまずかったから。責任は自分で取れ。第一、君らの飲み食いに公的資金は供与できない」一話は平行線だ。そこで私は次のような提案をした。「今日の純利益は過日公園で行った予行練習の費用で相殺されてしまった。予行練習には地域の中国帰国者も多数集まって一緒に食べた。

あれを日中交流会が元々予定していた焼き肉大会であったと事後解釈し、そのときにかかった費用2万円を今もらえないか」。私の妥協案は会長さんに受け入れられ、どうにかその場は収まった。

その晩、駅前の中国庶民料理の店「珉珉」の2階は黒龍會メンバーが占拠した。彼らが同伴していた妻や妹たちは適当に食べて先に帰った。その後、私達は中国語でギャーギャーわめきながら、日本酒を何度も乾杯した。何をそんなに叫んでいたのか良く覚えてない。ただ、きっと「珉珉」のおばちゃんは、店が壊されないか心配してたと思うし、「黒龍會様」という領収書を切らされて「この人ら何者?」と思ったに違いない。

●青年部の廃止一だが黒龍會は不滅なり

その後、青年部は会長さんから「離縁状」をもらった。「青年部の活動に期待したが互いに理解度が薄く今回の行事をもって打ち切りたい。今後は大人の行事(一搬)に参加してください」(原文のまま)とのことだった。一方、ヤングフェスタの方も2000年からはライブのみとなり、黒龍會は(青年部としては)その活動の場を失った。なお、私の方も、2000年以降は偽装中国帰国者問題への対応で忙しくなり、黒龍會のメンバーとはあまり遊べなくなってしまった。

現在、当時のメンバーの中には、嫁さんをもって真面目に働いている者もいれば、相変わらずブラブラしてて警察の御世話になってしまった者もいる(実刑確定者はゼロ)。ただ、黒龍會そのものは今も健在で、最近は「大日本帝国支部」ということで旗もちゃんと作ったらしい。

●これはフィールドワークなのか？

さて、以上に紹介したような私の調査対

象との関わりは、アクションリサーチだと言ってしまえば聞こえは良い。だが、これって結局のところ単なるヤラセではないのか。ちまたに溢れるアクションリサーチという便利な言葉。もしかするとこれは、フィールドワーカーが収奪という原罪から逃れるために、あるいはマッチポンプの自作自演やデータの不正操作を正当化するために行使する免罪符や隠れ蓑に過ぎないのかも知れない。

いや、それ以前の問題として、私の彼らとの関わりは、そもそもリサーチなのだろうか。フィールドワークや調査対象がエスノグラフィーを書くための手段や道

具であることをやめ、自己目的化してしまったり、私達はそれらを何と呼ぶべきか。また（ついでに言うと）大学の研究室→フィールド→大学の研究室という過程の中で、大学の研究室とフィールドのどちらがホームでどちらがアウェイなのか分からなくなってしまったとき、そこは一体どこなのだろう。

上記の間に対してはいくつかの答があるだろう。「偽善を気取ってないで早く民族誌を書け」「そういう両義的な状態に身を置き続けてこそ良い民族誌が書ける」「少なくともそういう建前で臨んでこそラポールが築ける」「そろそろ引き返さないと永遠に

帰って来れなくなるよ」等々。

大切なのは「この人達から何が引き出せるのか」ということだけでなく「この人達のために何ができるのか」について真剣に考えること—私は今までそんな態度で調査対象と関わってきた。こうした交易の姿勢こそが倫理的にも技術的にも正しいと思ったからだ。でも、そこに調査対象やフィールドに対する思い入れが加わったときは「要注意」。垣根を撤去された採算度外視のフィールドワークはその人の生活や人生の隅々にまで流れ出し、絶対に收拾がつかなくなる。まあ、でもこれこそがフィールドワークの「醍醐味」なのかも知れない。

地元研究者との付き合い方

中国・西南交通大学 青木信夫

●はじめに

平成11・12の両年度にわたり、「中国の歴史文化都市における持続可能な環境都市モデル構築に関する日中共同研究—成都における都市環境の総合的調査と整備計画—」の研究課題に対し、トヨタ財団より研究助成を受けた。ここでは、その研究内容についてではなく、国際共同研究の現場における地元研究者との付き合い方について所感を述べたいと思う。なお、テーマの性格上、特定の個人名については、割愛させていただいた。

●研究組織の確立

実は、この研究プロジェクトは当初、予備研究としてスタートした。初年度の最大の課題は、研究組織の確立にあった。極めて今日的な課題であったため、プロジェクトを進めていくうえで、研究組織の如何によっては、プロジェクト自体の存在理由が問われてくるからである。

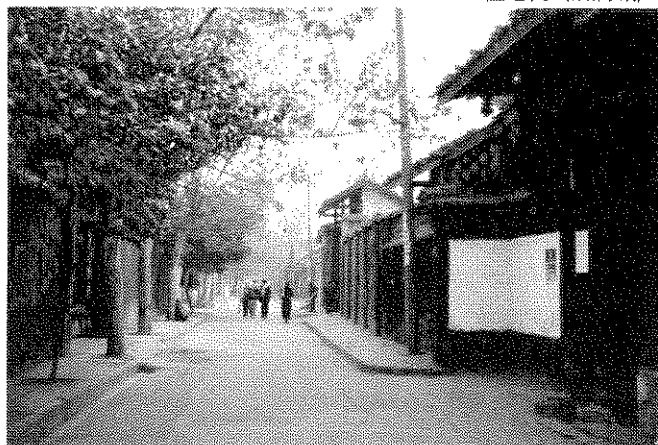
まず、中国特有の「単位」の問題に直面した。中国では個々の研究者が所属する「単位」が大きな意味を持っている。本研究組織で言えば、西南交通大学建築学院（成都）と清華大学建築学院（北京）がそれに当たるが、個々の研究者の裁量権は日本に比してかなり低く、所属単位（組織）を超えた学際的研究組織にはなかなか馴染まないという側面を有している。

しかしながら、単純にそうした研究風土に従えば、本研究の学際的特色が失われる危険性を孕んでいる。幸い、本研究が「国際共同プロジェクト」という性格を有すること、また、極めて今日的課題であり緊急性が高

いこと、さらに、日本側の研究助成によること等により、従来型のプロジェクトとは異なった柔軟な体制を組むことができた。

とは言え、本研究が具体的かつ持続可能な整備計画の構築を最終的な目標に据えていることは、単なる理想案の提出に終わらないことを示している。そのため、都市計画策定プロセスの詳細な理解はもとより、策定者からの情報収集や意見交換、ならびに関係機関との共同作業が不可欠となる。しかしながら、その途上においては、神経戦とも言える不断の交渉の連続で、実際、このこと

住宅街（旧満城）



に予想以上の時間を割くことになり、共同研究の難しさを痛感した。

この間、お互いの無理解から、ややもすれば放り出したくなるような事態にも遭遇したが、何とかプロジェクトを推進できたのは、個々の思惑や利害を超えて、より高次の問題意識が醸成されていったことにある。教訓として得たのは、物事をあまり固定的に捉えず、柔軟性をもって粘り強く対処することの重要性である。その意味では、常に最悪の状態を想定し、幾つもの改善の道を考慮しておく必要がある。

●さまざまな違い

1. 言語の障壁

まずもって立ちほだかるのは、言葉の問題であろう。現地における生活レベルの問題をはじめ、プロジェクトを進めていくうえで様々な交渉や、問題が生じたときの対応など、数え上げればキリがない。加えて、時間的にも経済的にも制約を余儀なくされているため、速やかに対処していかなければならない。

こうした点から考えると、日本語に習熟したネイティブの参加は必須条件と言えるであろう。むろん、単なる通訳者としてではなく、プロジェクトの趣旨を十分に理解した人物でなくてはならない。交渉が難航した場合など、時に、交渉の最前線に出ることもあり、両者の信頼の要ともなる重要な役割を担う。ことここに至っては、単に中国語に通じた日本人では役不足であろう。

本プロジェクトについて言えば、文書の作成から研究計画の策定、さらには交渉の具体的内容に至るまで、ネイティブ・チェックを行った。文化財をめぐる議論でも、文化的価値観には相互に違いがあるし、まして、その具体的保存法に至っては彼我の隔たりさえ感じる。そうした時に、贅肉を削ぎ落としたような言辞を弄しても、

相手には恩着せがましく映るだけである。

2. 研究とビジネス

中国に特有の習慣とも言えるが、接待の問題がある。それだけ、人間関係を大事にするととれるが、むろん、それだけではない。プロジェクトの立ち上げの段階で、接待攻めとも言える対応を受けたが、後になってビジネスの一環であることがわかった。内陸部の大学では、国際的な共同研究はまだ一般的ではなく、研究助成はそのまま巨大な外資の投入であり、大きなビジネスチャンスと映る傾向がある。つまり、調査・研究そのものにかかる経費だけでなく、それを遙かに上回る報酬を期待しているのである。とりわけ、“TOYOTA”のビッグネームは一人歩きしていった感があり、誤解を解くのに苦労した。

大学に限ったことではないが、中国では基本給与の額が相対的に低く抑えられており、副業によって生活レベルに差が生まれている。工学系の教官には、個人で会社を経営するものも多く、設計の下請けなど、アルバイトに精を出すことも珍しくない。また、著名教授ともなれば、他大学での講義にも積極的である(報酬が極めて高い)。そもそも日本のように、贅沢をしなければ、大学からの給与だけで、生活も研究もできる環境とは違うのである。

3. 学問と研究環境

自然科学は置くとして、人文社会系の諸学問では、社会主義体制の影響は免れない。ア priori に結論が導き出され、それに沿って都合のよい事例が引用されていく傾向が見られる。具体的に言えば、近代史研究(建築・都市)における外国の影響は否定的に捉えられており、当該領域における研究は未開拓とも言える状況にある。その意味では、個人の柔軟な発想自体を閉

じこめている感は否めない。しかしその一方で、近年、留学帰りの研究者が中心となって、新たな研究土壌が育まれつつあるのは着目される。

研究環境の面について見ると、人文社会系の置かれている状況は決して恵まれたものとは言えない。逆にこのことが、研究進展の足かせになっているとも言えよう。たとえば、歴史研究の基本となる史料の閲覧一つとっても、档案馆(史料館)では高額の閲覧費が必要となり、これに複写費が重なれば学生でなくとも躊躇してしまうであろう。結果、丹念な実証的研究には馴染まない土壌が育ち、根拠の定かでない論考が罷り通る。悪循環である。

実は、こうした問題は、対等に共同研究を進めていくうえで障害の一因ともなっている。まずは原典(一次資料)に当たり、必要に応じて複写をして資料収集を図る、という日本では疑うことのない研究のプロセス自体を考慮する必要がある。お互いがお互いの土俵で議論しても始まらないのであって、要は、どれだけ相手を知るかにある。

4. 面子

よく指摘されることであるが、中国人は面子を大事にする。それ故、たとえ研究上のことであれ、面子を傷つけるような言動や振る舞いは厳に慎むべきであろう。問題の所在を明らかにし解決を図っていく、というのは聞こえはいいが、現実的ではない場合も多々ある。とくに、日本人による直接的な問題の指摘は致命傷となりかねない。と言って、妙に萎縮する必要もなく、オープンかつフェアに徹すればよい。

自信と傲慢とは違う。常に相手の立場になって考えることを忘れてはならない。そこに、信頼も生まれるのではないだろうか。

●おわりに

実は、本年4月から私は西南交通大学で客員教授を務めている。当該プロジェクトを通しての大学貢献が評価されたことである。同大は内陸部を代表する国家重点大学の一つで、工学系（463大学）ではトップ30にランクインする評価を得ている。特に土木系は長い伝統を誇り、幾多の人材を輩出している名門である。

さて、先に述べた些か辛口の所感は、外野からの発言ではなく、内部の身を置く者

の課題として述べたつもりである。幸い、少壮の学院長（学部長）を筆頭に、改革の準備が進められており、中国初となる新学科の増設も間近に迫っている。一昨年末に打ち出された国家プロジェクト「西部大開発計画」も追い風となっている。何より、学生のモチベーションは高い。あとは、どうインセンティブを与え、導いていくかである。機は熟している。微力ながら、私の立場で全力で取り組んでいく所存である。

アン・ネットワーク」の概念が「朝鮮半島中心主義」なのではないか？そもそも「コリアン」ネットワークというのは、自民族中心主義、血統主義なのではないか？という疑問が投げられた。これに対して、民族的アイデンティティを強調することでこれを抑圧しようとした「国家」を越えていくことができるという面では、評価できるのではないか。それぞれの地に住むコリアンがそれぞれの地で築かれた新たな文化を互いに尊重しながら連携していくことが重要である、という意見が挙げられた。

コリアン・ネットワークは、周辺社会に対して開かれたものになっていく必要があり、それが東アジアの安定と発展のために大きな役割を果たすのではないかとというのが議論の焦点であったように思う。何より本会が韓国ではなく日本で開催されたこと、在外に住むコリアンからの発信であったことに大きな意義があるのであろう。

国際シンポジウム

「コリアン・ネットワーク」

去る11月14日（木）、15日（金）東京大学山上会館において「コリアン・ネットワーク」と題した国際シンポジウムが東京大学社会情報研究所の主催で開催された。2000年より社会情報研究所姜尚中教授を代表とするチームにより研究プロジェクト「20世紀東アジアにおける越境的ネットワークの形成」（トヨタ財団2000年度、2001年度研究助成）が実施されている。今回のシンポジウムは、その一環として開催されたものである。

日本植民地下での日本、中国、ロシアへの移住、スターリン体制下のソ連での中央アジア地域への移住、そして現在、中央アジア地域からロシアへ、中国から日本や朝鮮半島へとコリアンは、20世紀の歴史の中で移住を繰り返してきた。

「過去と現在にわたって北東アジアで展開されるダイナミックなコリアン系マイノリティの移動に注目し、越境的な『コリアン・ネットワーク』の歴史と現状、そしてその地域的な（リージョナルな）意義を共同で考え、討論する場を作ろう」という主旨

で開催された本シンポジウム。韓国、日本はもとより中国やロシアといった地域から在外コリアンの方々が集まって熱気あふれる会であった。

初日は、在日コリアン作家である李恢成氏の講演で始まった。李氏は、今年の夏に「故郷」であるサハリンへ旅した時のことを通して在外コリアンの歴史と現在、昨今の日朝間の問題などについて語った。李氏の親戚は、列島、半島そして大陸とアジアの7カ国6民族にわたるそうだ。民族や国境を超えた新たなつながりがこれからのコリアン・ネットワークのあるべき姿だという李氏の言葉は、振り返ってみればこの2日間の議論の根底に流れるものであった。

李氏の講演のあとは、中国朝鮮族である金強一延辺大学教授、韓国人である朴明圭ソウル大学教授、日本の朝鮮半島研究の第一人者である和田春樹東大名誉教授、在日コリアンである姜尚中教授によるパネルディスカッションが行われた。

ディスカッション後の質疑の中で、「コリ

2日目は、初日の議論を踏まえた上で現実に生きる在外コリアンの姿を現場で調査してきた方々より報告がなされた。午前中には、カザフスタン、中国の延辺朝鮮族自治州、ロシアのウスリスク、サハリンとアジアの各地に住むコリアンの歴史や実情についての調査報告。

午後の部は、「プロジェクト」と題して北朝鮮へ食糧援助を行っている李玲夏氏（在日韓国青年連合東京）などコリアン・ネットワークの中で現在動いている様々な実践活動の現場にいる方々らの報告があった。これらをさして姜教授は、「プロジェクト」は、未来への「投機」とであると表現していた。

報告を聞いていくうちに「コリアン・ネットワーク」という概念や理論は、いつしかアジアの広い世界を歴史に翻弄されながらも生きるために移動しつづけ、各地で出会いを繰り返しながら絆をつむいでいく

コリアンの活き活きとした姿となって目の前に展開された。地に足のついた人々の生活や移動こそが国家やイデオロギーを超えていく力となるのではないかと感じた。

2日間にわたるシンポジウムは、「学問」「研究」の報告という側面よりむしろネットワークの渦中にある人々による激白とといった感があつた。それは、決して内向きな議論ではなかったが、コリアン・ネット

ワークが真に開かれたものとして作用するためには、それぞれの地域社会において他の民族や文化とどう交流していくのか、それが今後の大きな課題であるように思う。その意味でも今回の会に各地域からコリアン以外の参加者があれば更に議論が展開したのではないかと、次回への期待をこめて最後に記しておきたい。(喜田記)

新刊紹介

沈黙の向こう側 — インド・パキスタン分離独立と引き裂かれた人々の声 —

ウルワシー・プターリア著
藤岡恵美子訳
明石書店刊

2002年3.5 366頁 四六判 ¥3,000
ISBN4-7503-1543-5

JCO 臨界事故総合評価会議研究報告会

「JCO 臨界事故3年後に見えてきたもの」

9月27日東京全水道会館において、JCO 臨界事故総合評価会議により、表題の研究報告会が開催された。これは、トヨタ財団の2001年度研究助成による「JCO 臨界事故の原因と影響に関する再検討と政策提言」の中間報告にあたる。

JCO 臨界事故総合評価会議は、市民の側からJCO 臨界事故の原因と影響を検証すべく、原子力資料情報室と原水爆禁止日本国民会議のよびかけにより結成された。報告会では、4名の方より調査報告がなされた。はじめに、JCO 刑事裁判を継続して傍聴している弁護士の伊東良徳氏より、裁判のこれまでの進行と現状が紹介された。続いて核化学を専門とする古川路明氏（四日市大学）より、事故の際に施設外に放出された中性子線の生体への影響についての報告がなされた。報告の中で古川氏は、中性子線のほうが他の放射能よりも生体への影響が複雑かつ未知数であり、断定的なことを述べるのは困難であること、今後長期に亘って健康への影響を調査することが必要であることを訴えた。長谷川公一氏（東北大学教授）からは、2002年2月に東海村、那珂町などJCO 東海事業所近隣住民に対して行われた生活影響調査の報告がなされた。長谷川氏によ

る調査の結果を見ると、いまなお生活や健康に不安を抱えている住民が多いことがわかる。最後の発表者末田一秀氏（自治労）からは、事故後各地に新たに建設されたオフサイトセンター（緊急事態応急対策拠点施設）の実態と問題点の指摘がなされた。

報告者の発言の中に「事故原因を明らかにしない限り、意義ある再発防止策はありえない」というものがあつた。しかし事故から3年という歳月が流れた現在でもなぜあのような事故が起きてしまったのか、その構造的な原因は、いまだ解明されていないようである。のみならず、裁判の状況や新設されたオフサイトセンターの問題点などの報告を聞くと行政や企業の体制や構造は、事故前の状況から全く改善されていないのではないかとすら感じる。最近では、各地の原発による事故、事故隠しの報道が相次いでいる。第2、第3のJCO 臨界事故を防ぐためにも事故原因の徹底的究明とその公表が望まれる。

JCO 臨界事故総合評価会議では、今回の報告者の報告を中心とした調査レポートを報告書としてまとめている。内容、注文方法等は、<http://www.cnrc.or.jp/jco/jcac/>に詳しい。(喜田記)

1947年にインドとパキスタンが分離独立する過程で、数ヶ月の間に1,200万人という史上最大規模の人々が国境を越えて移動し、その中で100万人以上が命を落とし、10万件を超えるレイプが行われたといわれている。本書は、印パの分離独立という政治的な出来事が一般の人々、特に女性や子どもたちにとってどのような経験であり、それが現在までどのように記憶され、あるいは沈黙の中に封印されてきたかを、10年余りの歳月を費やして探索した渾身の著作である。著者は、1984年にインディラ・ガンディー首相がシク教徒に暗殺されたことをきっかけに何千人もの人々が犠牲になった宗教暴動に遭遇し、それまで私的な領域で語られてきた分離独立の出来事が歴史の一コマではなく、現在も人々の記憶の中に生きていることを知る。そして、すさまじいまでの暴力の記憶

を掘り起こすことに躊躇し、悩み、苦しみ、自問自答を続け、常に倫理的問題に誠実に直



面しながら本書をまとめていく。

分離独立を起点にパキスタンとインド側に別れて暮らすようになり、実に40年余り音信不通であった叔父を訪問することから、本書は始まる。ムスリムに改宗し、パキスタンに留まった叔父は「私はこの40年間、自分の決断を後悔せずに眠れた夜は1度もない。ただの1度も」と語る。自分の家で家族と暮らしていても、安心して帰属することができないまでに引き裂かれてしまったこのような経験を、どのように理解したらよいのだろうか。公的な場には登場せず、同じ血を持つものだけに語られるこのような物語はあまりにも重い。

女性を取り巻く問題はさらに複雑である。膨大な数の女性たちが拉致され、レイプされ、妊娠させられた。もちろん、殺されていった女性たちも多い。それは、異なる宗教の男たちからだけでなく、自分と同じ宗教の男性の手によっても行われた。拉致された女性たちの存在は沈黙に覆われた一方で、「名誉」を守るために殺された女性たちは「殉教者」と呼ばれた。男たちがもはや女性たちを守れないことが判明すると、改宗させられたり、異なる宗教の子種を宿しコミュニティ全体が汚されるよりはと、一族の男性によって女性と子供たちは打ち殺された。女性のセクシュアリティをどのように扱えばよいのかを巡って国家は混乱し、無力さを露呈する。調査の過程で、著者はジェンダーによる語りの違いに気がつき、歴史記述の中に、女性の声を反映させることの難しさと重要性を提起する。あいまいな記憶であれ、選択的な記憶であれ、具体的な体験として語られるインタビューには数字には表れてこない人間の物語がある。南アジアを旅する途中、本書を読み終えた私は、1つ1つの物語のあまりの残酷さと、今も様々な形で続いている暴力の連続性を想像し、涙が止まらなかった。

本書は、ジェンダーはもちろん、国民国家論やナショナリズム、ポストコロナル、歴史と記憶の関係等広範な領域にわたる問題を提起しており、また、暴力や狂気の実態について理解する上でも深い洞察に満ちている。印パ分離に正面から向き合い、それを慎重に理解し、乗り越えようとする著者の声は、半世紀を経てもアジアの隣人たちとの間で戦争や歴史の問題を抱える私たちにとって大変重要である。先日、国際交流基金の主催により開催された講演会の中で、「本書を遠い時代に遠い場所で起こったこととして読んで欲しくはない。どんな社会でもさまざまな暴力は存在している。殺人をアイデンティティの違いによって正当化することはできない」と語っていた著者のメッセージを真摯に受け止めた。

なお、「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版助成を受けて、同書のインドネシア語への翻訳も“Sisi Balik Senyap: Suara Suara Pemisahan India”と題して Indonesiateraより出版された。(R. O.)

アフリカで象と暮らす

中村千秋著
文春新書刊

2002年4月 新書判 216頁 ¥690

ISBN4-16-660239-X

野生動物の宝庫として知られるケニアのツァボ国立公園は、広さ約2万Km²。これは神奈川、東京、千葉、埼玉、群馬を足した面積(19,643Km²)に匹敵する。その片隅に著者の暮らす4メートル四方の調査小屋があり、眼前にははるか地平線までサバンナ草原が広がる。人間の居住は許されていない。著者はここで1989年以来アフリカゾウの生態やその保護に関わる研究を続けている。

本書は、ゾウ研究者としてのユニーク

な体験を著者自らがつづったものだが、いろいろな楽しみ方ができる。まず、中学生のときにアフリカゾウの研究を一生の仕事にしようと思立った少女がどのようにしてその夢を実現していったかという冒険とロマンの物語として。また、象牙をめぐる密猟、密貿易といった人間の欲と、高価な牙を持ったがゆえのゾウの悲劇、あるいはヨーロッパ白人の植民地支配の不条理を明かす歴史物語として。さらに、人口増に伴う人間の居住圏拡大と野生動物の生息圏の競合という地球環境問題の最前線のレポートとして。そして、著者が地元の女性たちのコミュニティー活動を支援するため奔走し、単に与えるだけの援助ではなく、自分たちでプロジェクトを運用できる力を少しずつ引き出していった経過を語るヒューマン・ドキュメントとして。

新書なれども内容は濃い。財団は1989、91年度に個人研究として、2000年度には共同研究として著者の研究に助成している。(M. K.)

もっとほんとうのこと タゴール寓話と短編

ラビンドラナート・タゴール著

内山眞理子編訳

段々社刊

2002年10.10 四六判 184頁

¥1,800

ISBN4-7952-6520-8

最晩年に書かれた表題作である「もっとほんとうのこと」はおじいさんが孫娘のクシュミに語ったセリフから来ている。「この世の中にはね、ふたつのことがあるんだ。ひとつはほんとうのことで、もうひとつは、もっとほんとうのことだ」。もっとほんとうのこととは何だろうか？クシュミは続けて、「もっとほんとうのこ

と」は妖精の国でしか見られないの?と尋ねると、おじいさんは、「そんなことはない、この世界でも見ることができるよ。じっと見つめていればそれでいいんだ。ただね、それを見る目をもっていないければならない」と応える。

本書は、1913年にアジアで最初のノーベル文学賞を受賞したラビンドラナート・タゴールの作品集『ささやかな書き綴り』、『お嘶集』、『物語集』の中から、現在でもその輝きを失っていないタゴールの思索の真髄を伝える作品10篇を選んで構成されている。作品には多くの日本人にとってあまりなじみのないベンガルの大地、風景、樹木や花が登場するが、不思議と違和感がない。見知らぬ土地の養分をすくい上げて生まれてきた言葉たちであるにもかかわらず、人間の心の深き淵を流れる内なる生命力を呼び覚ますような物語は、私たちの魂に直接語りかけてくる。生の中に死があり、死の中に生があるような世界観が、日常の何気ない物語を通じて私たちの心に響いてくる。大河の流れに身をゆだねるように、この世界の生きとし生けるもの全ての存在を受容し、調和を与えるような何かがある。ユーモアや皮肉、そして時には悲哀に満ちた物語は、人生の喜怒哀楽や世界の本質を豊かなイメージで描き出し、精神の崇高さとやさしさについて考えさせてくれる。

本書は、氾濫する情報と消費文化に振り回される21世紀の初頭を生きる私たちに「もっとほんとうのこと」を見る目を与え、1人1人が本来持っていたはずの生命

の輝きを取り戻すための魔法の言葉にあふれている。(R. O)

**軍が支配する国インドネシア
市民の力で変えるために**

シルビア・ティウォンほか編
イスクラほか画
福家洋介・岡本幸江・風間純子訳
コモンス刊
2002年10.15 B6判 200頁 ¥2200
ISBN4-906640-43-5

本書の原典は“Militerisme di Indonesia untuk Pemula”『初心者のための入門インドネシアの軍国主義』である。シルビア・ティウォン氏をはじめとする5名のNGO活動家が編者となり、99年ワヒド政権下のインドネシアで95のNGOにより共同出版された。

本書では、日本語タイトルのとおり、軍がインドネシア国民を支配してきた構造的な暴力について、軍が関係したさまざまな騒乱や事件、軍の二重機能、軍を支えたスハルト政権、軍のビジネス等に触れながら人々の視点から解説している。

また、インドネシアの民主化をすすめるためには軍による人民の支配を取り除くだけでなく、知識人を初めとする幅広い層の人たちが議論できる環境をつくることが重要であるという著者の考えに基づき、イスクラをはじめとする海外在住3人の作家の漫画がふんだんに使われている。

本書の翻訳を担当した大東文化大学の福家洋介氏、インドネシア語通訳の岡本幸江氏、中京女子大学教員の風間純子氏は、NGO活動を通じてインドネシアと関わって

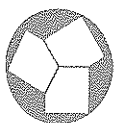
おり、インドネシアの軍や現代史についての専門家ではないが、だからこそ初心者にもわかりやすい日本語での翻訳と丁寧な解説を心がけているのがうかがえる。(E. K.)

**こどもとおとなとつくる時間—
共同保育30年のあゆみ—**

青い保育園編集委員会 編
千書房刊
2002年10.5 B5判 177頁 ¥1,500
ISBN 4-7873-0038-5

本書の表紙には、「こんな保育園あったんだ」と書いてある。「こんな」保育園というのは、「一戸立ての民家が園舎」の「保育士の先生がいない（専従と呼ばれるスタッフがその役割を担う）」「0歳から5歳までの子どもたちが一緒に過ごす」そんな保育園である。東京都大田区にある「青い保育園」は、園児の親たちがともに子どもを育てる「共同保育」の小さな保育園。本書は、その「青い保育園」の30周年を記念して出版された。

本書の内容は、青い保育園の日常、歴史、関わってきた親や子供達による青い保育園にまつわる様々なエピソード。最後には、資料編として保育園に関する諸制度、子育てに関するQ & A、青い保育園以外の共同保育を実践している保育園の紹介が掲載されている。原稿、編集ともに青い保育園に関わってきた人々の手による手作り感覚の本ではあるが、子育てに悩む、保育園の問題に頭を抱える多くの親たちにとっては、得がたい情報のつまった一冊である。トヨタ財団では、本書出版に際して2001年度市民活動助成を行った。(R. K.)



トヨタ財団レポート No.99

このレポートを継続してご希望の方、また住所等の変更がございましたらお薬書にて財団までお知らせ下さい。

発行日 2002年12月20日
発行所 財団法人 トヨタ財団
発行人 蟹江 宣雄
編集人 本多 史朗
印刷 真友工芸株式会社